

古墳時代前期最大の方墳 ……謎の多い島根の前期古墳…

四隅突出型墳丘墓は、古墳時代が始まるとすぐに造られなくなり、全国各地で前方後円墳が造られ始めるこの時期、出雲では当時全国で最大の方墳が造られていました。その場所がかつて四隅突出型墳丘墓が盛んに造られていた安来市の荒島地区で、造山一号墳や大成古墳などが知られています。

これらの古墳は、墓石を持つ二辺五〇メートル前後の

巨大な方墳です。前期古墳としては全国に例のない巨大なものです。内部の埋葬施設には、五メートルを超える割竹形木棺（竹を二つに割ったような形をした木棺）と、それを納める竪穴式石室という、前方後円墳と同じものを使っています。

一方、小規模な古墳では、弥生時代から造られている方形の墳丘に木棺を入れているものがほとんどで、墓上

では土器で祭りをしていることも弥生時代と共通しています。新しい点としては、副葬品に鏡や剣が出現することや、一つの墳丘に二〜三人しか葬られていないことなどがあげられます。

これらから、畿内勢力と関係を持ちながらも出雲が独自性を持っていたとする説や、畿内に古墳の形を制限されていたとする説などがあり、正確なことはまだわかりませんが（詳しくは三巻、三巻を参照）。

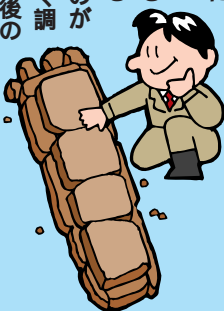
発掘こぼれ話

……小さな古墳…

古墳から出土する物には、鏡や剣、勾玉など、現在の私たちが見ても「これはきつと大切なものだ」と思わせるものがあります。しかし、よく調査される一〇メートル前後の小さな古墳ではこうした人目を引く品が出てくるのは珍しいことなのです。ですから、鏡でも出れば、調査員たちはけっこう緊張します。

しかしこの小さな古墳は、古代史を解明するうえで、非常に重要な役割を担っています。たとえば五メートルもある大きな古墳から鏡が出た場合、埋葬者の立場や入手経路など、その古墳の全国的な位置づけができます。しかし、その古墳がその地域で果たした役割とか、性格は見えてきません。それを知るためには、周辺の大多数を占める小さな古墳を調べる必要があります。たとえ何も出ない古墳でも、木棺の形や盛土の仕方、立地などから多くの情報が得られるのです。

今日も県内のどこかで、古墳の発掘が行われています。新聞やテレビをにぎわす大発見は少なくても、島根の古墳時代は、少しずつ解明されつつあるのです。とはいえ古墳から何も出ないとはやはり寂しいのが、調査員の正直な気持ちですが…。



鏡・玉・剣・やす（寺床1号墳出土）

古墳に葬られた人物に添えられた品には、いろいろなものがある。一般に知られている鏡・勾玉・鉄剣は古墳時代の前期を代表するもので、後期になると、鏡と剣はまず見られない。



寺床1号墳（東出雲町眞屋）

古墳時代初めごろのもので、長い木棺を載せた石敷が現れた。排水用の溝が付いていることから、亡き首長の前で水を使った葬式が行われたという説もある。銅製の鏡、鉄製の剣、ひすいの勾玉などが添えられていた。今は東出雲町運動公園に移築され、見ることができる。

長大な木棺の出現

古墳時代前期の大きな古墳には、弥生時代には見られない五メートルを超す巨大な竪穴式石室を持つことが多く、内部に納められた木棺も、一人の人間を入れるには長すぎるものです。そのため、亡き首長の権力を次の首長が引き継ぐ儀式が古墳の上で行われ、その際に木棺が重要な役割を果たしたとする説があります。

また大原郡加茂町の神原神社古墳からは、「景初三年」（三三九年）銘の三角縁神獸鏡が出土して、全国的に話題となりました。この年号は、邪馬台国の女王・卑弥呼が魏から鏡を授かった年にあたり、古墳発生の年代を知る手がかりとなっています。赤川の河川改修に伴い調査され、現在は石室が神原神社横に移築公開されています。



神原神社古墳（加茂町神原）

長い木棺を石で覆った石室。床はやや丸みをもっている。



中山古墳群（石見町中野）

80基以上からなる、山間部としては大規模な古墳群。調査された8基には石棺、木棺の両方が見られ、鉄製のよろいが出土している。弥生時代にさかのぼるものもあると考えられる。



月廻古墳群

（松江市比津町）
丘の上にある20基以上の古墳群。箱形の石棺や、底に小石を敷いた木棺の跡などが見つかり、鏡、玉、鉄器などが出てきた。現在は住宅団地。

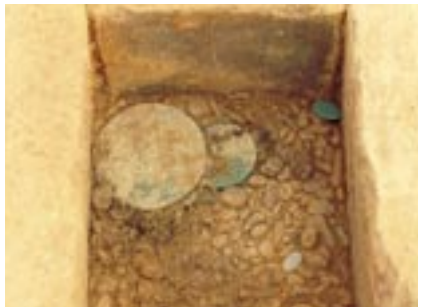


安養寺1号墳（仁摩町天河内）

丘陵の岩盤を掘り込んで、石棺が納められていた。4世紀の終わりのものか。現在は砂の博物館。

奥才古墳群（鹿島町名分）（下3点）

4世紀の終りから6世紀の初めごろの古墳群。石棺と木棺の両方が見られ、銅鏡や石製の腕輪などが出土。丘陵上に連なる50基が確認され、うち26基が調査された。現在は住宅団地。



鏡（奥才14号墳）

石棺内部には人骨は残っていなかったが、頭部と考えられる位置に鏡が置かれていた。



木棺（奥才12号墳）

内部には、鹿島町周辺に造られた古墳の特色の一つである、玉砂利が敷き詰められていた。木棺は、長い年月により朽ち果てるため、痕跡しか残らない。



石棺（奥才13号墳）

石棺のフタは粘土により密閉されていた。2基並んでいるのは夫婦か、兄弟か？



新林古墳群（安来市宮内町）

3基の古墳が発見された。2号墳からは、古い古墳特有の棺である割竹形木棺が2つと、壺棺が出てきた。現在は道路となっている。



山地古墳（出雲市神西沖町）

墓石のある、ややいびつな円墳。木棺内から鏡や筒の形をした青銅製品、玉などが出土した。